



「次回！ 最終話『地球に帰還！ ハッピーエンド！』 みんな、ここまで俺を応援してくれてありがとうな！」

……そんな主人公のナレーションと共に先週録画したアニメ番組が終了した。

一人の地球人が異世界転移し、召喚主の姫に勇者に任命され旅を重ね仲間を増やし、笑いあり涙ありの物語を続け最終的に魔王を倒す。びつくりするぐらい王道のファンタジー異世界転移モノだ。

そんな王道アニメは正直な所、面白い。キャラもすっかり立っているし、ストーリーも悪くない。

残念ながら覇権アニメにはなっていないが評価は高い。何も知らなければ彼もグッズを買うぐらいにはハマっていたかもしれないだろう……が。

「……なんでアイツが異世界にいるんだよ」

アイツとは……彼、高田ユウマの親友なのだから。

ユウマは地元の大学に通う大学生。とある日、小学生から付き合いがあり同じ大学に通う親友が行方不明になった。一向に連絡を寄こさない親友に頭を悩ませる日々が続いていたが……とある日放映されたアニメを観た瞬間にその不安は消えた。画面にいる転生者の名前、素性、地球での出身地、果てには声までもが親友と全くと言っていいほど同じだったからだ。

このアニメはきちんとしたアニメ制作会社で作られている。何で親友の旅がアニメ化され、何でこうやって地球で放映され、何で声優も親友とそっくりの声を出し、そもそも何でアニメになっているのかワケがわからないが……。

このアニメが放映されている頃、親友は何をしているのだろうか。もしかしたらこのアニメと親友の行動はリンクしているのだろうか？ それとも旅路を記録し、その後アニメ化した結果一ヶ月程度のズレが生じているのだろうか。

「それはアイツが帰ってきてから問い詰めよう。次回には地球に帰ってくるらしいし……」

ベッドに寝転びスマホのとあるアプリを眺めながら彼はそう呟く。ある日、突然インストールされていた怪しいアプリを起動すると……こんなメッセージが表示されていた。

「このアプリは好きなアニメの話題を二文字だけ修正する事が出来ます。どう使うかはアナタ次第です」

起動時に手書き風な綺麗なフォントの注意文にはそう書かれている。こんな字を書くキャラがああアニメに出ていたが魔王の側近キャラだったはず。

何でこんなアプリがインストールされていたのだろうか？ 何で起動してしまったのだろうか？ 何かしろという事だろうか……？

「話題……二文字だけ修正、ねえ」

起動し適当に動かしていると【第一話…○○】の○○部分を修正できる事がわかった。側近キャラの文字に似たフォントが使われているのもあり、親友のアニメの話数を見直していく。

「第一話…異世界転移、第二話…仲間……うーん……」

本当にびっくりするぐらいのテンプレ異世界転移。そんな時【第七話…勝利！ 大妖狐戦！】と書かれている部分が目に入った。

「確か……」

第六話あたりで現れた新キャラの仲間らしき女が実は大妖狐と呼ばれる魔王軍の手先で、仲間との友情を壊しかけた挙句に親友の命を奪いかけたが失敗し、仲直りした親友と戦士と呼ばれる男が協力技で見事打ち倒し二人の友情がさらに深まる話。そんなタイトルをダブルタップし……勝利という部分を敗北に変更してみた。

「このタイトルに変更しますか？」

はい。

「変更しました」

……あっさりと終わる。画面には【第七話…敗北！ 大妖狐戦！】と書かれており、他の話数を修正しようとする、このアプリはもう使えません。とメッセージが表示されるだけだった。

「……アホらし」

彼はバカバカしくなってアプリをアンインストール。スマホを充電器に刺して、その日はもう寝る事にした。明日も大学だ、夜更かししすぎない程度に睡眠はしっかり取っておこう……と思いつながら。

翌日。大学で他の友人達と雑談を交えつつ講義を終え、昼飯を食べる為に大学の食堂に赴く。いつものように頼み、お金を払い、食事を受け取って席に座る。友人達は皆都合が合わずソロ飯だ。

「なあ、あのアニメ見たか？」

「いやあ〜……マジであの展開はビビったよな、六話まで王道の異世界転移だったじゃん」

隣の席にいた二人組の男がそう話しているのを聞き取れた。六話まで王道の異世界転移……？ 今年のアニメで異世界モノといえば親友のアニメしか無いはずだが。

「まさか七話で【敗北！ 大妖狐戦！】なんてよ。あれであのアニメの注目度が増したわ」

「ホントだよ、今日の最終話マジで楽しみ」

「(えっ……?)」

男達の話聞いて、彼は慌ててスマホで公式サイトを見た。本来ならば勝利！ と書かれているはずなのに敗北！ と変更されていた。

敗北になった事で、八話以降も変更されており……人類がどんどん劣勢に立たされているのがわかる。

「(なんだよこれ……本当に……?)」

あのアプリは本物だったという事か……？ 調べれば調べるほどあのアニメの内容がまるで変わっている事に気付き、食べていたカツ丼の味が全くしなくなっていた。

午後の講義に出ずに慌てて自転車に跨がり、一人暮らしをしているアパートへ帰る事にした……。

自室に戻った彼は、慌てた気持ちのままテレビを付け録画していた親友のアニメのタイトルを見直す。
第七話のタイトルが本当に変更されており、和解決したはずの親友と戦士が仲違いを起こしたまま大妖狐が
正体を現し、親友一人じゃ相手にならず大妖狐に敗北して第七話は終わった。

【第八話…眷属の刻印】

……ここは大妖狐を打ち倒した事で左手に真の勇者の刻印を手にしパワーアップする話だったのに、左手に
大妖狐に紋章を刻まれる話が変わっていた。

画面の親友がうめき声を上げたかと思うと、その身が徐々に変質していく。
まず変わったのは親友の肉付きだった。ガッチリとした男性の筋肉が柔らかく、女性的に変わったと思うと
手が細くなり、肌も女性らしい白っぽい色へ変化した。

肩幅が狭くなり、胸が徐々に大きくなっていき……大妖狐に劣らずとも言えない胸の大きさになり、呻き声が
徐々に高くなっていく。親友の見慣れた顔が女性的になり、瞳の色が日本人らしい黒から金色に変化してい
くではないか。

次に股間を押さえた親友の手は空を切り、本来なら突起物があったそこはすでに何も無くなっていた。
最後に髪の毛が根元から金髪に変わっていき徐々に伸びていく。人間の両耳が消失したかと思うと髪の毛と
同じ色の金色の立派な狐耳が頭頂部から生えたかと思うと、尾てい骨からもふもふの尻尾が一本生えた。

……親友が妖狐に変貌した。それも女の。

彼はその光景にしばし動けなかった。これ……ウソだよな？ いや、これは親友に似たキャラがこうなった
だけであって、親友本人じゃないよな？ そうだよな……？ 手を震わせながら九話以降を観てみる事にする。

【第九話…主様と妾……♡】

【第十話…ニンゲンってこんな弱いのかえ？】

【第十一話…決戦！ ニンゲンの国】

徐々に魔王城に近づき、さらに現れる強敵を倒していく話だったのに……大妖狐に促され身も心も眷属妖狐に変わり果て人間軍の本拠地へ近づいていく話に変わっていた。

仲違いを起こしたままの戦士を打ち倒し、さらに恋仲にもなりかけていた僧侶を魔力タンクとして捕らえて幽閉し、今まで助けてきた村や街に他の魔物達と攻め……親友が助けたある少年を犯して養分にしていた。

……話が進めば進むほど、親友は親友ではない知らない一匹の妖狐へと変わり果てていく。一本だった尻尾も力を付けた事で二本、三本と増え……十一話開始時点では五本に増えていた。

昔、勇者をやっていたという王が現役時代に匹敵する力を開放するも親友はそれを難なくいなす。数分後には王はポロポロになり、親友は王に近づいて……。

「王様……最後に教えてあげるのじゃ。妾の名は……」

そう言い、王の身体を跡形も無く消滅させた。本来ならば、ここで勇者の力を全開放し魔王を跡形も無く消滅させて次回予告のナレーションに入るはずなのに……。



「次回！ 【最終話…初めての眷属は地球で妾の親友と♡ ハッピーエンド♡】 みんな、ここまで妾を応援してくれてありがとうなのじゃ♪」

妖美な声で妖狐に染まりきった目を視聴者に向けながらそう言い放つ親友の成れの果て。

「……」

もう彼は言葉を出すことも……この話がウソか否か調べる事すらできなかった。現実逃避をするかのようにベッドに横たわり気絶するかのように眠る。

——この時、次回タイトルを聞いて逃げていれば助かったかもしれないのに……。

「……」

時刻はすでに深夜二時を刺していた。空はすっかり暗くなり、窓だけではなくカーテンすら開けっぱなしだ。

「……テレビも付けっぱなしだったか」

カーテンを閉め、電気を付け……テレビのリモコンの電源に指を当てたその瞬間だった——。

「あれ……？」

突如チャンネルが切り替わった。すると、親友の異世界転生アニメが放映されているではないか。

そこには九尾の尻尾を生やした大妖狐と、ニンゲン共をなぎ倒してきた親友の成れの果ての五尾の眷属妖狐。青の魔法陣の上に立ち、大妖狐に何かを告げている。

『主様……これから魔物達の世界が始まるのじゃ♡でも、妾は一旦地球に帰りたいのじゃ。子供だった頃から付き合いがあって、とっても大事な友人が地球にいるのじゃ』

……目を丸くして、その画面を見ていた。

『その男を……妾の眷属第一号にしたいのじゃ』

親友の成れの果てのその言葉に——彼の背筋は凍った。

『名前……？ それは——。』

リビングが目を瞑らなければいけないほど青く輝いたかと思うと……そこに、一人の妖狐が立っていた。

「ユウマ……妾の妹になるのじゃあ……♡」

テレビの声とハモるように……妖狐はそう言い放った。

手入れされた狐耳に髪の毛に、一本一本が意志を持ったかのように揺れる五本の尻尾。大きな胸を支えるように両腕を胸下で組み、誘うかのような妖しい表情を向ける親友からは体感したことがない威圧感を放っていた。

「あっ……あぁっ……」

その威圧感は弱き生命体では本能的に死を悟る程だった。腰を抜かし、尻もちをついて震える事しかできない。どれだけ言葉を保えようと……この魔物娘には一切説得できないと。

いつものまにか消えていたテレビの向こうでは彼の震える姿と声が全国に放送されているのだろうか。

腰を抜かしている彼に一步一步近づいていく。ゆっくりと屈む妖狐からは化粧とお香のような香りに女性の匂いが混ざり、チャイナドレスを押し上げる大きな胸と魅力的な谷間に、本来なら心臓を高く鳴らし顔を赤くする場面だが……。

「怖くないのじゃ……♪」

彼の左手を取る。あれだけ人間を手にかけてきたというのに、その手にはシミ一つついていない。

女性ならではの細くて美しい指が彼の左手の甲に何かを刻んだ。それはアニメで見た大妖狐が親友に刻んだ刻印と全く同じのモノ。その刻印が金色に光ったかと思うと……彼の左手がプルプルと震え妖狐と全く同じ色と細さを持った女性の手に変質していた。きちんとマニキュアも塗られ、大人のオンナの指である事がわかる。

震えと変化は左手から腕まで伸びていく。普段着のパーカーの袖が素肌になり、すっかりと柔らかい脂肪を持った細い腕に変化していた。

……ついに変化は胴体に及びつつあった。

左肩だけが女性らしいなで肩になり、左胸が徐々に膨らみを増していく。その膨らみは右胸にも及び右肩も女性らしくなつたかと思うと、腹から上の服がチャイナドレスに変わり……胸が妖狐とほぼ同じ大きさにまで膨らんだ。その胸はずっしりとした重さと谷間を持ち、男共を皆魅了してしまふだろう。

首と顔がぶるつと震えた彼の首元が細くなり……喉仏が消失し、ソプラノボイスを発する事しかできない喉へ変わり男性的なガツシリとした顔回りが細く優しいモノへ……。

ニキビがシミもすっかり消失した頃には、目がぱつちりと開き日本人らしい黒の瞳は金色へ、丸い瞳孔は動物らしい縦に伸び……その顔には薄化粧が施されていた。顔だけを見たら妖狐に負けず劣らずの美女。今は腹から下や髪の毛が人間の男性のモノだが……それも時間の問題だろう。

頭頂部から何かが生えて来ようとしている。三角の金色の毛を持ったそれが伸びてくるたびに彼の人間の耳は身体に吸い込まれるに消えていく。生えたばかりの狐耳は真横に倒れ……今の彼の感情を現していた。

髪の毛が根元から金色に変化していき伸びていく。彼は狐耳も相まって頭部に重みを感じつつ、髪の毛が腰のほうまで伸びていくのがわかる。そんな髪の毛は妖狐と同じように頭で纏められた……。

……上半身が完全に妖狐に変貌してしまつた。彼の腰周りが細く、くびれの付いたモノへ変化していくと同時に彼は下腹部がかき混ぜられているような感覚に襲われた。

痛くはない。だが長年親しんだ股間が身体に吸い込まれ……腰の奥が広がり熱を持って行くのがわかつた。

彼——いや、彼女は己の性別が変わつた事がわかりつつも……チャイナドレスの股間に手を当てるとそこは空を切つた。

